

## 九州北部豪雨災害支援「災害流木再生プロジェクト」：木のいのちと英彦山修験道文化

知足, 美加子  
九州大学大学院芸術工学研究院

<https://hdl.handle.net/2324/7172150>

---

出版情報 : Wood science in Kyushu. 25 (1), pp.6-9, 2018-03-01. 日本木材学会九州支部  
バージョン :  
権利関係 :

## 主張・総説

九州北部豪雨災害支援「災害流木再生プロジェクト」  
— 木のいのちと英彦山修験道文化 —とも たり  
知 足 美 加 子

## はじめに

自然災害のカタストロフは、人間のあたりまえの日常を寸断してしまう。被災者は、ある日突如として「昨日と繋がらない今日」を生きることを強いられる。

2017年7月5日、九州北部豪雨災害が起こり、約21万トンの流木が被害を拡大するという事態となった。被災地（福岡県朝倉市、東峰村、添田町、大分県日田市）では、特に木に対して、恐怖や怒りといった感情が向けられがちだった。九州大学では、災害直後より異分野の研究者が結束し「九州北部豪雨災害調査・復旧復興支援団」として被害の調査や復旧に取り組んだ。芸術工学研究院では、建築やデザイン、アートを中心に「災害流木再生プロジェクト」を行うこととなった。木に対する負の感情を少しでも軽減し、復興につなげようとする取り組みである。

復興は環境や生活の復旧だけでなく、地域への愛情を基盤にした「心の復興感（前を向く力）」が必要である。被災地は、英彦山修験道文化圏<sup>ひこさん</sup>にあり、古来より木と水を文化的、精神的な支柱としてきたところである。本稿は、木に対するイメージに働きかけ、地域をエンパワーメントする創造的実践について述べるものである。

## 1 熊本震災「板倉の家ちいさいおうちプロジェクト」

災害流木再生プロジェクトのメンバーが出会ったのは、2016年の熊本震災支援の時であった。熊本震災では度重なる余震から車中泊する被災者が多く、健康問題が深刻化する傾向にあった。そのため、被災者の自宅敷地内に板倉構法<sup>1</sup>による避難小屋を建て

る提案する取り組み「板倉の家ちいさいおうちプロジェクト」を行った。また地域の木材資源を活用し、森と人の暮らしを繋げようとした。2016年6月には、寄付された杉材と大工有志、ボランティアの協働により、熊本県西原村<sup>にしはらしゅうごうどう</sup>に「西原習合堂」

（図1）を完成させた。アート関係者によびかけ、損壊家屋の廃材を再利用して木工品を作るワークショップも同時に開催し

た（図2）。また、森と暮らしをつなぐ復興住宅というコンセプトのもと、子供達と森づくり体験「西原村宮山ヒノキの伐採、枝落とし体験ワークショップ」を行った（図3）。森への意識を高めることが森林資源の活用を促し、防災に繋がる森づくりを可能にする<sup>と</sup>メンバーは考えていた。



図1 「西原習合堂」 2016年



図2 「廃材再活用木工品」 2016年



図3 「枝落とし体験ワークショップ」 2016年

<sup>1</sup> 壁塗りを行わない木造建築の伝統構法。

## 2 九州北部豪雨災害「災害流木再生プロジェクト」

熊本震災の翌年に、大規模な山林崩壊と河川氾濫をとまう九州北部豪雨災害が起こった。熊本震災支援のメンバーである朝倉市の杉岡世邦（杉岡製材所）の森も被害を被っている。大量の流木の殆どはバイオマス化されることとなった（図4）。林業関係者は自らの森林被害だけでなく、流木に対する人々の負の感情に深い心痛を負った。



図4「流木集積所(旧朝倉農業高校)」2017年

杉岡は「木もまた被災している。いのちとしての木を活かす方法はないのか」と自問していた。このような状況をふまえ、芸術工学研究院では「災害流木再生プロジェクト」（建築、デザイン、アートの分野で流木を活かしたものづくり）を行うこととなった。具体的には自治体間交流としての公共施設の看板制作（図5）、家具作り、グライダーワークショップ（図6、7）、彫刻、しおり作り（図8、9）である。



図5 田上健一「自治体間交流(福岡県那珂川町)」2017年



図6,7 尾方義人「流木利用の家具、グライダー」2017年

このプロジェクトでは、流木を再利用して家具やアート作品を作ることが行われ、被災地の復興と環境保護に貢献している。また、流木を再利用することで、木材の資源を有効活用し、環境負荷を減らすことも目指している。



図8、9 知足美加子「彫刻下絵、流木しおり」2017年

その中で、知足研究室では学生達がデザインした災害流木しおりを販売し義援金にあてる活動をしている。また、統廃合される朝倉の小学校（松末、<sup>ますえ</sup>くぐみや <sup>しわ</sup>久喜宮、志波）の児童に、校名と校章を刻んだ流木しおりをプレゼントしている。筆者は、樹齢



図10「災害直後の松末小学校」2017年

132年の樟（くす）の流木の彫刻（水の守り神としての龍）を、被災地の小学校に寄贈することとなった。子供たちが地域を好きでいてくれれば、未来はあると考えている。

朝倉の松末地区は、最も被害が大きかったところのひとつである。松末小学校は避難所となり、児童だけでなく近隣住民の命を豪雨災害から守った（図10）。小学校近くには、上部からの流木を松末小学校側に流れないようにせき止めていた杉（杉岡所有の森林）があった（図11）。災害後も立っているが、防いだ流木を片づけるために切られた。筆者は、この杉材と校庭の小石を使って「松末の木と石の時計作りワークショップ」を企画した（図12）。子供達の手の中で、木が大切なもの、愛さ



図11「松末の杉林」2017年



図12「松末の木と石の時計作りワークショップ」2017年3月開催予定

れるものとして生まれ変わってほしいと願っている。材料の丸太材は、九州大学准教授・藤本登留によって小口で切っても割れないよう長時間乾燥されている。

### 3 英彦山修験道における木の文化

豪雨による福岡県の文化財被害は11件、そのうち4件が天然記念物の樹木であった<sup>2</sup>。福岡県添田町の町指定天然記念物「吉木の山桜」(図13)も豪雨で倒壊している。添田町ではクラウドファンディングを利用して、この山桜の彫刻を作り、添田駅に設置しようとしている。日田彦山線(添田か



図13 「吉木の山桜倒壊状況」2017年(添田町役場提供画像)

災害通行止めが続いており、鉄道開通への願いを込めて彫刻設置をしたいという。その彫刻と返礼品制作を筆者が請け負うこととなった。この事例のように、樹齢を重ねた木のいのちが不本意に途切れたとき、それを活かしたという心情が働くのはなぜだろうか。

復旧・復興にあたって、地域の文化を理解することは、場に根付く感情の連続性を守る上で重要である。九州北部豪雨被災地は、英彦山修験道文化圏との関わりが深い。修験道は、古来より自然そのものを神仏と考へ自然を護持した。英彦山は水分神とよばれ、水資源と、水を担保する木を大切にしてきたところである(筆者は英彦山山伏「知足院」の末裔)。多くの場合、神棚のお札の中には木が入っている。また日本には海外より圧倒的に木彫仏が多い。私たち日本人は古くから木に対して祈ってきたのである。

被災地の東峰村(英彦山の麓)には「行者杉」という樹齢200年から600年、約4.68haにわたる375本の杉の巨木群がある。英彦山山内には「千本杉」と呼ばれる杉林、樹齢約1200年の「鬼杉」(図14)など、修

験者が植樹したとされる杉が多数存在している。修験者の十界修行のひとつとして「出生勧請」がある。これは仮の死を経て、山から新しい命を授かる(擬死再生)という儀式である。



図14 「鬼杉」樹齢1200年

生まれ変わった修験者は、先祖を思いながら枝を投げた(植林した)という。このような文化思想が、九州における挿し木技術の普及に影響を与えたと筆者は考えている(英彦山は明治以前、九州一円に42万戸の檀家をもち大きな影響力があった)。

英彦山の神領を七里四方とよび、鎌倉期以前は九州北部豪雨災害被災地を含め守護不入の領域であった<sup>3</sup>。水資源への信仰が里民の寄進を促し、英彦山はどの藩にも属すことなく独立を保った。1333年、後伏見天皇第6皇子長助法親王(助有)が英彦山座主となり、山内ではなく現在の朝倉市黒川で神領を治めた(1573年舜有まで。忠有より座主院は山内に移る)。よって黒川地区の英彦山信仰は特に厚かった。豪雨被災地に点在する高木神社(大行司)は、英彦山の神域を示している。

英彦山山伏の自然護持の姿勢は、「四土結界」という思想にも表れている。結界とは宗教的な忌避を伴うゾーニングのことである。英彦山は標高1199mあり、これを一定の標高ごとに4つ(A常寂光土、B実報莊嚴土、C方便浄土、D凡聖同居土)に区分する(図15)。これは修行による精神的な成長段階と対応しており、最上部の結界Aは峰入り(約40km間を歩く十界修行)を15回修めた山伏しか立ち入りを許されず、汗や涙など水を汚す行為を厳重に慎む必要があった。ブナの原生林を保護する。結界Bは人が住む家を建て

<sup>2</sup> 福岡県朝倉市9件、東峰村1件、添田町1件(福岡県教育庁調査)

<sup>3</sup> 長野野「山岳宗教(修験道)集落英彦山の構造と経済的基盤」駒澤地理15.5-51、駒澤大学1979年p.6

ることを禁じ、千本杉が植林されている。結界Cには山伏の住まい(坊)が約800戸あり、里の檀家の来訪を受け入れていた。結界Dは五穀栽培が禁じられていたが、山伏以外の人間も居住が許されていた。結界思想は、神仏である自然を守ることに功を奏していた。山内の木は、山外からの持ち出しを禁じられていた。

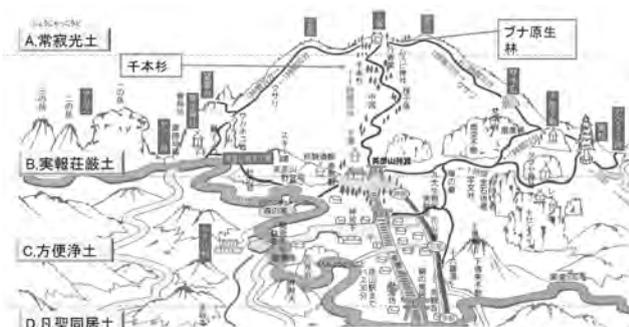


図15 「英彦山四土結界」(添田町役場提供地図に筆者加筆)

山伏の修法のひとつに「護摩焚き」がある(図16)。これは柴を焚き、自然界にある木火土金の要素(五行)を一体とするものである。概ね、木に関する山の仕事を集約したものと考えられる。

修験道は、神仏習合を旨とし、神道や仏教を組み合わせ多元的な価値観を共存させた。これも自然が信仰対象であった

ことから成立した概念であろう。例えば木彫仏は、「仏という対象」を「神の依り代としての木」を用いて彫っており、仏と神を同時に拝むことは矛盾しないのである。ま



図16 「採燈護摩」英彦山神宮 2016年  
た山中他界観では、亡くなった魂は山を登って土や木や水に還り、神仏(自然)と一体化する。自然を思考の中心におけば、先祖崇拝や神仏への信仰は、違和感なく共存できるのである。先祖信仰とは特別な宗教ではなく、木と水の恵みを理解し、感謝できる人々

の自然な感情だといえる。木や水の恵みは一朝一夕で生まれるものではなく、先祖の尽力があってこそ享受できるからである。

修験における「験」とは、繋がりと見えないものに対する想像力である。見えないものとは、微生物・有機的な生命の連鎖・自然の営み・会うことのできない祖先や子孫などを含む具体的かつ現実的なものである。自分の命のスパンを超える「水と木」は、見えないものを想像する力の結節点である。人間の寿命を越えて生きる木を中心に、山は圧倒的な生命の関係性を育んでいる。その調和の美しさは「私たち人間もまた、生命の輪の中で何度も生き直せる」と諭してくれるのである。自然環境は、強いレジリエンス(復元力)をもつ文化アーカイブと言えるのかもしれない。

## おわりに

本稿では、熊本震災支援、九州北部豪雨災害支援として、「木」を中心とした創造的実践について述べた。まず「板倉の家ちいさいおうちプロジェクト」では、余震への不安を軽減するために自宅敷地内避難としての板倉小屋建設を提案した。大工や木材関係者有志によって西原村習合堂を建て、損壊家屋の廃材で木工品づくりを行った。九州北部豪雨災害では、大量の流木による土砂災害が人々の意識に与えている影響を鑑み、木への負の感情にアプローチする「災害流木再生プロジェクト」に取り組んだ。豪雨災害被災地が英彦山修験道文化圏であることから、木や水などの自然信仰に基づいた文化観について述べた。被災した自然環境を復旧し、倒れた木のいのちを何かに活かしたいという願う心は、英彦山に限らず、森林と共に暮らしてきた日本人には共有できるものであろう。これからも木を中心に、みえないものへの想像力を養い、創造し、行動していきたい。それが、「昨日と繋がらない今日」を「あたりまえの今日」に変えていく小さな一歩になると考えている。

(ともしりみかこ：九州大学大学院芸術工学研究院)